
My Dream,

ニヤッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Dream ,

【Nコード】

N3415F

【作者名】

ニヤッピ

【あらすじ】

「俺の夢ってなんだろう」今日配られた進路調査用紙を見ながら考えていた。数日後、彼は学校で有名な一人の少女に出会う。そんな彼女の話しを聞くと、彼女には夢があるという。

プロローグ（前書き）

初めまして、ニヤッピィです。今回が初投稿なので緊張気味です。読んでいただければ嬉しいです。

プロローグ

ヒック・・・ヒック・・・

どこからか泣き声がある。

辺りは一面、橙色に染まっている。でも、どこか薄暗い。

「そうか・・・。僕は『夢』を見ているのか」

そこには、女の子が一人、泣いていた。こんな夕暮れの公園で・・・。一人ぼっちで。彼女はなんで、こんなにも泣いているのだろう。ふと、そこに一人の男の子がやって来た。

「ねえ、いつしよに遊ばない？」

男の子は女の子に手を差し延べた。

「えっ・・・」

女の子は驚いていた。

「いいから、いつしよについて来て。」

そう言って、男の子は女の子の手を握って走って行った。

「ちょっと、どこに行くの？」

「とつてもきれいな場所！」

男の子は無邪気に、楽しそうに言った。

「ねえ、あなたお名前は・・・」

「僕の名前は・・・」

第1話：夢

直斗オーイー。

誰かが俺の名前を呼んでいる。

「一ノ瀬直斗オーイー。聞いてるかー。」

「ふあゝい。」

直斗は欠伸をしながら言った。クラスからくすくすと笑い声が聞こえる。

「エ、そのプリントは20日までに提出するように。」

キーンコーンカーンコーン。終わりのチャイムが鳴った。

「エ、テストまであと5日なので、寄り道しないように。エ、以上です。」

そう言い終えると、教師はさっさと教室を出ていった。

ここは私立神谷高校。そして、今3・DのSHRが終わったところである。

教師が出ていった途端、クラスがざわつき始めた。

「直斗オ、一緒にどこか行かないか。」

いきなり教師の捨てゼリフを無視している。

「ふあゝ。ああ、陽介か。ん、まあいいけど。」

彼の名前は、多軌たき 陽介ようすけという。一ノ瀬直斗とは中学からの同級生で、親友でもある。

直斗はまだ眠たそうに言った。何か夢を見ていた気がするが・・・思い出せない。

陽介はそんな直斗に呆れている。

「直斗、まだ眠いのかよ。ほら一発。」

バチーン。クラス中に響いた。陽介は直斗の背中をおもいつきり叩いた。

「いって。おもいつきり叩くなよ。お前はほんつとに・・・。」

「まあ良いじゃんか。ええつと何だったっけ。」

「おいおい、どっか行くんだろ。」
今度は直斗が呆れている。

「ああそうだった。よし、じゃあ行くか！」

「はいはい。」

そう言っていると、直斗は帰り仕度を始めた。帰り仕度を終え教室を出ると、陽介に急かされながら2階の階段を歩いていった。

タッタッタッタツ。

後ろから足音が聞こえる。

タッタッタッタッタッタッタツ。

その足音は次第に速くなっている。直斗は思わず振り返った。その時、

ドンツ！

そいつのバックが直斗の肩にぶつかってしまったのだ。

「おい、ちよつと待てよ。」

直斗はそいつを呼び止めようとした。けれど、そいつは無視して、そのまま階段を駆け降りて行った。

「おい、なんだよアレ。」

直斗はそいつの去っていく姿を見て、陽介に嘆くように問う。

「ああ、あいつは確か・・・水無楓みずなし かえでだよ。隣のクラスなの。なんか学年一位の成績で、相当変わり者らしいぞ。全部聞いた話なんだけど。」

「へえ・・・そんなやつ全く知らん。」

直斗は少し落ち着いたようだ。

「おいおい、結構有名人だぞ。教師に・・・。」

「ああ〜。もうこの話ヤメヤメ。考えるとまた腹が立ってきた。」
「お前が言い出したんだろ。まあ、いいけど。」

陽介が何か言いたげだったが、もうその話は終わりだ。二人は違う話をしながら校門を出た。

あつ、そういえば・・・

「ん、何か言ったか。」

「あのさ陽介、さっきのHRの話って何？」

「あゝ、ハゲ松が言ってたやつ。お前、お昼寝中だったもんな。」
ちなみに、ハゲ松とは担任の長松のことである。

「確か・・・進路調査のことだったよ。来週の水曜までに出せよ。」

陽介は投げやりに言った。どうやら、思い出さなくないらしい。

「進路調査ね。また面倒臭いのがきたな。」

直斗も厭そうに言っている。

「あと、提出日までにしなかつたら、居残り喰らうらしい。」

直斗は更に落ち込んだ。どうやら『しなない』という選択肢はなさそうだ。

「陽介は書くことある。」

「全然。」

陽介は考えることもせず即答した。お前はこの三年間何をしていたんだ。そうつつこみたくなるところだが、それは自分も同じなので人には言えない。

「そうだよな。教えてくれてどうも。」

直斗はそう言うと、また別の話をしながら歩いて行った。

陽介と街でブラブラしてから家に帰ると、そのままベットに倒れ込んだ。

進路か。俺の夢って何だろう・・・

そう思いながら直斗は眠りに就いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3415f/>

My Dream,

2010年12月25日14時31分発行